

ほなひ歴史通信

第75号
2015.6.1

文人墨客の足跡を辿る

「袋田の滝及び生瀬滝」が平成二十七年三月十日に国指定の名勝に指定されました。三年目を迎えた「天子町の文化遺産を活かした地域活性化事業」は、「袋田の滝を訪れた文人墨客とその作品（短歌や俳句、漢詩、唄、絵画など）やそれらにちなんだ名所・旧跡を紹介」することを目指しています。

袋田の龍泰院前からは、男体山・長福山などの山並みをよく観ることができます。月居山を南に、生瀬富士を北に、その谷間に袋田の滝があります。これらの急峻な山々は約一六〇〇万年前の海底火山の噴出物の地層であり、その火口は長福山であったといわれています。標高約二五〇メートルの生瀬盆地から流れる川が、この硬い岩石を刻み込んで峡谷と滝を形成していきました。

明治十九年（一八八六）に旧月居トンネルが完成します。それまでは、月居観音堂手前の標高約三二五メートルの月居峠を越えたのです。そのころ、多数の植物画を残し、明治三十九年に満四三歳で病没した五百城文哉が、明治二十五年頃に「袋田の滝」を描いています。文哉は、明治二十四年十二月から大子地方に逗留して新年を迎えています。

大正九年（一九一〇）六月一日、文筆家の大町桂月は袋田の桜岡馨苑に「四度の大瀑より持方男体へかけて御案内を辱うし難有奉存候」と書状をしたためています。紀行文『水戸の山水』（大正十年発行）には、「桜岡氏が案内してくれることになつて、川づたひに四度の瀧壺まで

行き瀧に対する絶壁を攀ちて、不動堂から、瀧を眺めた。…少し後戻りして、瀧を右にして、山を攀じた。峠に達して、ふりかへると、溪谷は一面の霧である。其中から瀧の音が洩れてくる。いろいろの鳥の声も洩れてくる。…足もとの谷は狭霧にとざされて瀧の音やら鳥の声やら」と書き記しています。

昭和二年三月に水郡線が大子駅まで開通すると、袋田駅から袋田の滝までの道路が整備されていきます。昭和三年の「袋田公園計画書」には、「瀧ヲ擁シテ月居山及び鞍掛四度等ノ連峰（田村博士命名ノ五老峰）南北ニ対峙シテキル：五老峰ハ文字通り岩山デ今日ノ処登攀ノ道ナキモ、ソノ好義的奇景ニ富ムハ注意スベキデアル」と記され、田村博士が、鞍掛山、四度山などを命名しました。

その頃、昭和二年三月に開業したばかりの水郡線に乗って瀧谷義彦氏（茨城大学名誉教授）が父に連れられて袋田の滝見物に訪れています。瀧谷氏は、「初めて見る滝、見上げる滝の壮大な景色には、何と云ってよいかわからぬくらい感動した。滝のこゝろ音が一瞬自然の奥に消えたような記憶もある」（本誌第三〇号）と述べています。

その昔、袋田の田圃の中から低温度の湯が出て「田毎の湯」と呼ばれていましたが、昭和十一年にボーリングに成功して、現在の袋田温泉ができました。そこで、袋田の滝と温泉地を結びつけて観光地として整備されて行きました。交通事情も、昭和五十一年に天皇皇后両陛下を迎えて全国植樹祭が開かれた際に、新月居トンネルが開通し、アスファルト舗装が進みます。

「地域活性化事業」では、袋田の滝を訪れた文人墨客として、「西行法師 徳川光圀 斉昭 長塚節 大町桂月 野口雨情 中山晋平 横山大観 大智勝観 太田聴雨 堅山南風 奥村土牛 中村岳陵 齋藤隆二 徳富蘇峰 田山花袋 小川芋銭 大仏次郎 中山義秀 立原杏所 五百城文哉」などの名前があげられています。

いつ、だれが、滝からどんなことを感じ、どんなことを考えたのか、どんな作品を残したのか。様々な情報を寄せていただきたいと思えます。

（野内正美）

大内義一と保内郷の弓道

神長 攻

水郡線の西金駅前に小室順太郎の胸像がある。小室の経歴を簡単に追ってみると、西金に明治十七年（二八八四）に生まれている。下小川村立西金尋常高等小学校を終えると祖父を頼って上京し、錦城中学校を卒業した。近衛歩兵第一連隊に入隊し日露戦争に出征したが、足に貫通銃創を受けた。その後郷里に戻り、幸久村（現常陸太田市）の大内義行の次女・琴と結婚した。馬好きで「奥久慈産馬の父」とも言われ、下小川村議六期、同村長二期、さらに昭和三十年（一九五五）の町村合併後は大子町議を二期務めている。小室ら多くの人々の尽力により発展を見せた西金地区であったが、今日では児童数減少に見舞われ、平成十七年（二〇〇五）にはついに西金小学校は閉校のやむなきに至った。同校の前身である西金尋常高等小学校に在職された教員の中に、琴の父親とよく似た名前の人物がいる。大内義一先生である。明治三十三年一月二十五日から翌三十四年六月十六日までの約一年半在職されたが、弓道の分野で精進され、大いに名を馳せた方である。明治十三年に幸久村に生まれた先生は、同三十九年、二六歳の時に森山崇徳から大和流免許を得、大正五年（一九一六）（三六歳）に本多流皆伝、生弓会師範、昭和四年（四九歳）に大日本武徳会弓道範士、昭和二十八年（七三歳）に弓道範士八段といった実績を積み、昭和三十一年に七五歳で死去された。学習院や東京帝大の弓術師範を務めたほか、今上天皇に本多流の手ほどきもされている。『学校弓道』

『弓道の目的』等の著書もある。

霞五郎著『保内郷土誌 おらが在在所』（昭和二十七年刊）の「弓道の巻」には、興味深い指摘がある。少々長いが引用しておこう。

明治初年の頃、水戸藩大和流指南藤田清定が生瀬に来ていたが、のち西金に行つて神長道之介、大内義一（幸久村出身小学校の先生）らに教えた。片目の先生であったが、すこぶる厳格だった。程なく大内義一は生瀬小学校に転任したが、肥後巴之助の所に東京京華中学の根屋鹿児がコーチに来て、大内の手筋を見て、東京で本格的に習うことをすゝめた。大内は明治四十年（西暦一九〇七年）に上京、遂に東宮殿下弓道師範にまでなった（現在杉並下井草の不忘館々長七十三歳）。

昭和四年頃、大子警察署裏の田圃にささやかな矢場が出来て、柴田正、金沢勘義、菊池仁太郎、豊田八郎、神長近之介、塚田金重、矢田部亥之松、大藤広喜、柏吉太郎らが集つて古い古を行つていた。十五年に警察裏に本格的な矢場が出来て現在に及んでいるが、保内郷の弓道家は今三十人位でまだまだ盛んにはなっていない。

小室家の当主徹哉氏によれば、大内義行は県会議員を務めた人で、琴は太田線に乗つて水戸の女学校に通学していた。大内義一先生は、義行の新宅の出で、弓の名人との話が残つているとのことである。朝日新聞社編『写真集 平成即位の礼』には、昭和二十四年、弓を持たれた若き殿下の写真が載つている。保内郷に弓道の種を蒔いた水戸藩士藤田清定は、明治三十年代に旧上小川村頃藤に住んでいたが、その後の足跡は不明である。小室順太郎が、美人の琴と結婚したのは明治四十二年で、大内義一先生が上京した後のことであつた。

（大子町在住）

大子町産出の化石の紹介（上）

笠井勝美

大子町には、八溝山と八溝石、男体山火山と袋田の滝、金山群と硯石等の優れた自然遺産があります。これらの自然は地層中の化石によって形成年代が解明されています。ここでは産出される化石と、その地質年代について古い時代のものから順に紹介します。

一 古生代と中生代の産出化石

（一）八溝石の石灰岩中の海百合化石（古生代二疊紀）

八溝石の石灰岩は八溝山麓の大子町上野宮磯神や蛇穴に産出し、庭石や水石として珍重されています。海百合化石は八溝石石灰岩に含まれています。

海百合は現在でも海中に生存しておりますが、古生代の二疊紀には現在より大繁栄しており、古生代、二疊紀の石灰岩の中には多くの海百合が含まれています。八溝石は、古生代二疊紀の海山が中生代の海溝に沈み込み礫石になったもので、海百合化石は、古生代二疊紀のものと考えられています。この化石は、大子清流高校の八溝石中に見られます。

（二）大子駅南方の鷺子山塊の植物化石（中生代三疊紀〜ジュラ紀）

駅南の山地に産する植物化石は中生代三疊紀からジュラ紀のソテツ葉類とシダ植物等が多く、二〇種類位植物化石を産出しています。以前は古生代から中生代初めの物と考えられていましたが、現在は三疊紀からジュラ紀の物であると、放散虫の化石によって特定されました。この植物化石は福島県立自然博物館に保存されています。

（三）上岡大平産出の放散虫化石（中生代最上部ジュラ紀）

上岡大平から栃原線林道脇の頁岩（泥岩の硬いもの）の中に産する放散虫化石は、バルパスに属している中生代の最上部の地層と特定されました。この化石は筑波大学の研究室に保存されています。

大平の西方の地層は逆転層で西方ほど古く、山田の南山（五一メートル）には中生代三疊紀のチャート層が分布しています。放散虫化石は、大沢口の野倉の頁岩層にも産し、中生代ジュラ紀を示しています。

（元大子町史編さん委員）

地質時代	岩質	備考	
新生代	第四紀		
	第三紀	6千5百万年前	
中生代	白亜紀		
	ジュラ紀		山田大平(放散虫化石)
			植物化石
三疊紀		チャート 2億4千7百万年前	
古生代	二疊紀		
	石炭紀		



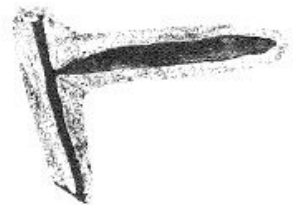
八溝石（海百合化石）



種子シダ（シダ植物の実と葉）



プラジオザミテス（ソテツ葉類）



ポトザミテス（ソテツ葉類）

私の太平洋戦争記 (三)

野内泰子

新しく移った所は、今までとは全く違う土地柄で山の手であった。

横須賀という所は、海岸線が複雑で山が海にせり出しているようなどころが多く、変化に富んだ地形で眺めもよく、天然の良港として軍港としては最良の地であった。電車の窓からの眺めも美しくトンネルを出たり入ったりしながら、大きな軍艦の浮かぶ海や島を眺めたものだが、この頃になると、機密地域が見えてしまうということで、線路の脇に海が見えないように長い長い塀が造られてしまった。

新しく移った衣笠は、国電横須賀線の横須賀駅と久里浜駅との間にあり、横須賀駅から衣笠駅までの殆どはトンネルであった。駅のすぐ近くに衣笠国民学校があり、生徒数は一五〇〇人ほど、今までいた浦郷国民学校の半分ほどで小さい学校だというのが第一印象であった。しかし、建物はモダンで特に正面玄関のあたりは素敵であった。家はここから、五、六分の小高い山の上で海軍用の住宅であった。

この頃から、子どもの私にも戦争の激化が感じられるようになった。

これより約一年前に東京や名古屋で初めてのアメリカ機による空襲があり、横須賀でもしばしば空襲警報が発令されるようになった。昭和十八年三月、ニューギニア増援の輸送船団全滅（ダンピールの悲劇）、同四月連合艦隊司令長官山本五十六戦死、同月アッツ島守備隊玉砕、同六月広島湾内で戦艦「陸奥」爆発事故にて沈没。同九月イタリヤが連合軍に無条件降伏。十九年二月米軍の空爆を受けてトラック島の基地機能崩壊。同六月サイパン全滅、

テニアン、グアム空襲、日本軍航空部隊壊滅。同月マリアナ沖海戦、日本海軍空母三隻、航空機三九五機喪失、惨敗。と日本軍の敗戦の様相が色濃くなってきた。そして、本土決戦などという声も大きくなった。

物資は極端に不足し、特に、軍備に必要な鉄などの供出が強制された。橋の欄干などにつかわれている鉄ははがされ、お寺の鐘もすべて供出、鐘楼だけが残った。だが、この頃はまだ良かったといえる。やがて、学生服のボタンまでむしり取って供出したのである。家庭でも、必要以外の鍋釜や刃物など金目のものはことごとく供出の対象となった。

空襲警報が出されることも頻繁となり（サイレンで合図）、夜は明かりが外に漏れないように電灯の笠を黒い布で覆った。また、ガラスが爆風で飛び散らないようにガラスに紙を貼り付けた。日本中が真っ暗闇の夜をすごしたのである。日本各地の大都市が空襲を受け焦土と化していったが、横須賀は一度も爆撃を受けなかった。空襲は毎日のようにあったが、上空を通り抜けたり旋回して威嚇するだけで爆撃はしなかった。アメリカ軍が日本を占領した後、横須賀をそっくり基地とするためだろうと言われた。そして、その通りになった。

病氣・疎開

昭和十九年六月、北九州が空爆を受けた。そして、その月のある朝、私は何故か気分が悪く朝食が入らなかった。登校の支度はしたが立ち上がる気力もわかず、部屋のすみに行って横になってしまった。父は既に勤めに出かけ、中学四年生になっていた兄も学校へ行った。引越しをしたために、兄の学校は、家から徒歩で行かれるすぐ近くとなっていた。心配した母が今日は学校を休みなさいと言ったとき空襲のサイレンが鳴った。

（大子郷土史の会）

大子町城館跡探訪六

野内智一郎

七 依上城跡（大子町塙字中城五六四外）

大子町の西部、大子町塙字中城に依上城跡は所在する。当地は大子町中心部から北西の方角に位置し、城館跡が多く点在する地区に当たる。水田やまばらな宅地が続く国道四六一号沿い、押川を南にした台地上に依上城跡は比定されている。国道から台地上に上がる道は非常に勾配がきつく、道も細い。比高二〇m近くはあろう台地上に上がると、その縁辺部にいちだんと高い木々の茂った小山が見える。この頂上部分が主郭とみられるが、今回、一〇mはあろう最上部までは到達することができなかった。

城跡の周囲を小道がぐるりと廻っており、主郭南側からは下の平地を遠くまで見渡すことができる。北側の台地も踏査したが、小川が流れているものの、緩やかに下っており、城跡の北の範囲は現状では分からない。北の小川を越えると妙見山、石尊山という四〇〇m前後の山に続く山々となっている。台地上の畑の方まで城跡が続いていてもおかしくはないが、現状からその具体的根拠を探ることができなかった。主郭部南側は岩が崖をつくりだし、こちらから到達するのは不可能である。

また、比較的勾配の緩やかな北側には小さな池があり、台地上であるにも関わらず水に困らない場所であったようだ。訪れた日は雨の降った数日後であったが、やや粘土質の土質であるためか、あちらこちらの小さな穴に水が溜まっていた。郭はこの小山で八つほど確認されており、最頂部を中心として三段ほどに構成されているという。郭の一つ一つはそれほど大きさはなく、台地上の小山だけを想定すると急峻であるものの、いかにも小ぢんまりとした印象を受ける。近隣住民の話によると、子供のころはこの

小山に登って遊んだりしたそうだが、今は山が荒れてしまつて、登る人はほとんどいないということだ。

依上城という名称については、大子地域が依上保と呼ばれたように、一時期なりとも当地域の中心として機能した可能性が高い。『新編常陸国誌』によると、この依上城は、佐竹氏庶流の北酒出氏の分家である依上氏（顕義）が室町時代に築城したといわれる。依上義長の後、同じく佐竹氏庶流の山入氏より養子（宗義）を迎え、以後、山入氏と行動を共にしていく。

特に、応永十年（一四〇三）に始まる佐竹本宗家と庶子山入氏の抗争である山入の乱（佐竹の乱）の際には、佐竹本宗家と緊張状態にあった。鎌倉公方の足利持氏と元関東管領上杉氏憲（禪秀）の不和から応永二十三年（一四二六）に起きた上杉禪秀の乱の際、佐竹本宗家を継いだ佐竹義憲（第十一代関東管領上杉憲定の子）が足利持氏方に、山入与義・依上宗義が上杉禪秀方につくこととなる。そのため、山入、依上両氏によって統治されていた依上の地は、翌応永二十四年（一四二七）の上杉禪秀の死後、鎌倉公方の追討を受け、派遣された里見家基によって依上城は落城した。

持氏は禪秀方の勢力に対して肅清の手を緩めず、応永二十九年（一四三二）には鎌倉に出仕していた山入与義を鎌倉の比企谷の館において滅ぼした。この時、与義の三子依上宗義（依上三郎）も討たれ、依上氏は滅んだ。その後、持氏は依上保を白河結城氏朝に預け、依上城は廢城となった。

これ以後の依上城の様相は伝わっていないが、遺構の状態が極めて良好に保存されている依上城跡は、それ自体が歴史を物語る重要な遺産である。また、当地域に佐竹氏の支配が確定する前と後とを比べた際に、依上城の存在意義というものが大きな意味をもつ可能性があるだろう。

（水戸市在住）

昭和三十年代におけるりんご栽培の広がり

―特産品・りんごのルーツを探る(一)―

今日、大子町を代表する特産品の一つとしてすっかり定着したのがりんごである。昭和十九年(一九四四)春頃に、旧生瀬村の黒田一さん、宏さん親子の手で最初の苗木が植えられて以降、その成長過程は数多くの先達たちのまさに労苦と試行錯誤の結晶であると言っても過言ではない。本稿では、りんご栽培が広がっていく様子の一端をいくつかの資料で明らかにしてみたい。

苗木が植えられて間もない、いわば草創期の事情については本誌第三号で簡単にふれたが、大子で「うまくいくはずがない」との周囲の冷やかな目にもかかわらず、りんごに着目し取り組もうとする人は少しずつ増えていく。次の指摘がある。「昭和二六〇七年より、生瀬村以外でも、依上村下金沢齊藤一郎、同菊池敏雄、芦野倉木沢良夫、大子町上岡本田文夫、菊池正男氏等、続いて芦野倉木沢源一郎、浅川藤田金一氏等が加わり、昭和二八年、茨城りんご生産出荷組合を組織した。組合では毎年研修費を計上し、代表を福島、山形、秋田、青森、岩手、長野等の先進県に派遣し、技術の修得をさせ、組合員に普及させた」(茨城県園芸協会『二〇年のあゆみ』)。この組合の初代組合長には黒田宏さんが就いたが、組合設立の背景には、「みんなで団結していいりんごを作ってよく売ろう。それには組合をつくる必要がある。技術も統一しないし、出荷の場合もバラバラでは売り物にならないという考え方」(黒田宏さん談)があったという。また、大子地区農業改良相談所が昭和三十二年一月に作成した「調査資料」には、「昭和二九年四月会員一五名で生瀬りんご組合を設立し肥培管理の指導を行ひ昭和三一年四月茨城りんご出荷組合に改組し現在組合員三〇名を以て品種の統一と出荷統制を強化、優秀な生産を得るに至った 主なる事

業(一) 優良苗木の共同購入(二) 講習講話会の開催(三) 先進地の視察(四) 薬剤の共同防除」との記述がある。

もう一つ、昭和三十三年十一月九日付「いはらき」新聞は、「大子地方一円にリンゴ栽培が盛んとなり三〇年には黒田さんが組合長となって茨城リンゴ生産出荷組合が誕生。現在五〇名の会員を数え全耕作面積は一五ヘクタールにのぼっている」と報じた。さらに『茨城県農業改良普及事業二十年史』は、「急速にリンゴ栽培者が増え、昭和三六年には、大子町に於いて三五〇名、栽培面積も実に九〇ヘクタールに及んでいと述べている。三十年代における栽培面積の広がりや生産者の増加についてはもはや明らかであるが、各資料に登場する生産者組織間の関係はどうであったのか、設立年の異同も含めて今後の検討課題にしておきたい。

このような生産の広がりは、生産者の自助努力だけで可能になったわけではない。強力な公的支援機関の存在も大きかった。ここでは、その一つである茨城県山間地帯特産指導所についてふれておこう。この施設は、茨城県北部山間地帯の一一か町村を対象に、各種農作物の栽培技術の改善と輪作体系の確立を図るために設けられた試験研究機関であり、当初は、茨城県山間地帯特産指導農場として大子町大字北田気に昭和三十二年四月に設置された。三十四年十一月に前記名に改称され、また五十五年九月には同町大字頃藤に移転している。りんごも試験研究対象に加えられ、開始時には黒田さんの樹園地のりんごが移植されて展示栽培が始まったと言う。最初は萩谷修孝技師を中心に「農協の営農指導員、黒田宏氏とその同志が、寝食を忘れ部落懇談会などを行ない、リンゴ栽培の有利性をとぎ、産地作りの第一歩を踏み出した」(茨城県農業改良普及事業二十年史)。三十五年春、萩谷技師の後任として着任したのが大森高行技師である。大森さんは、五年後の四十年春に急逝されるが、黒田一さんは、「とくに大森さんという技師は熱心で、よく指導してくれた」と回顧している。(齋藤典生)

大生瀬地区の生活・民俗今昔考（一）

—「ゆりかごから墓場まで」葬儀を考える—

父は、私が高校一年であった昭和四十六年（一九七二）の秋、県民の日に他界した。当日は、妹二人を連れ面会のため水戸へ水郡線とバスで行った。帰宅して間もなく訃報が届いた。最近、映画「おくりびと」「おみおくりの作法」を観る機会があった。そんなことから、「冠婚葬祭」を連想した。大子町大生瀬地区を対象に、「葬儀」、そして対極の「出産」「結婚」の今昔を考えてみたい。

他界後、五日目の十七日が葬儀だった。十四日の夕、御近所様が集まって葬儀の相談が始まった。相談は両近所様が中心になって組内の皆様で行う。葬儀の日時から始まり、六尺・寺・買い物・飛脚・料理献立・役場死亡届等の葬儀までの流れ一切を決定する。なお、葬儀・告別式は、友引ととらの日を忌み嫌う習俗である。この分担は、二人組で行う。六尺は四人である。相談が終わるとお寺担当が立出。僧正様の予定が決まると皆の動きが本格化する。各担当の役割を考察する。まず主役の六尺だが、棺桶・共同棺・衣装、そして墓地の清掃と墓地までの道の整備、墓地の穴掘り、葬儀を僧正様とともに管理する。総括は両近所様の男衆である。会計から葬儀全体を統括する。料理献立を管理するのは両近所様の女衆である。六尺をサポートする者が二人程度で、清酒一升に塩むすびや茶菓子・饅頭等を届ける。これらは、この六人で平らげねばならない風習である。持ち帰ることは、不吉とされる。しかし、食糧事情が悪い頃なので完食されるのが常である。六尺の呼称は、穴の深さからの由来である。六尺は、墓穴掘りと葬儀当日は当家の風呂に入る。下着は別だが共同衣装・袴は当家が洗濯し、次の葬儀が発生するまで保管する習わしである。

次に、飛脚である。飛脚は葬儀等全般を知らせるのである。当

時は、自家用車はほとんど無く、自転車とオートバイ、バス、汽車で車賃を載いて二人組で出かける。二、三軒を一日がかりである。迎える側が大変である。例えば親仕舞の家でも御馳走を用意して待つのである。そして、酒の接待を受ける。年配者の話では、最近まで、遠路の場合にはその家に泊って翌日帰ってきた例もあるそうである。電話が普及してしばらくしてからは、電話で組内の者が知らせ、現在では当家が知らせている。

次に、親仕舞である。本葬儀と同様に組内の皆さんで相談し、飛脚・六尺は無いがまったく本葬同様に仕切るのである。さらに当日は、両近所様二人が付き人になり、それ以外の組内が留守番である。葬儀に行くとき香典はこの両近所様が使って領収書をいただく。葬儀終了後、初七日法要が営まれるのだが、本葬儀の組内の人への御礼も早々に切り上げて帰途につき、紙戒名を早く自宅に持参し、今度は自宅の参列客と組内皆様への振る舞いである。

次に、女性がする料理仕度である。共同使用の本漆塗りの本膳で三食を作る。この器が大変である。冬は寒くて大変だが、夏よりましである。当時は冷蔵庫が無いので、裏側の風通しが良い場所に置くが傷んでしまう始末である。毎食作るのである。また、出棺時に箒で掃き、箒を転がし、水汲みの者を呼ぶ風習がある。

葬儀当日は、帳場や僧正接待、六尺、進行等と任務が多いので息子等含め組内総出で分担する。これが土葬による自宅葬である。

昔は土葬が当たり前だった。昭和四十六年町火葬場が長岡の永源寺下にできた。が、主流は土葬である。やがて火葬後に土葬する家が始める。そして納骨堂が多く作られるようになり、土葬が消えつつある。さらに、平成十年に町斎場ができ、同年十一月稼働する。同時に町火葬場が廃止された。この頃から自宅葬が一気に減り、斎場で葬儀し納骨するようになる。さらに組内では帳場を担当する位で葬儀社が入るようになり、最近では全て葬儀社任せで、組内も参列するのみの葬儀も見うけられる。（齋藤仁司）

「袋田の滝及び生瀬滝」国名勝指定記念式典

平成二十七年四月二十七日十一時より袋田観瀑トンネル内の特設会場で、「袋田の滝及び生瀬滝」国名勝指定記念式典が盛大に執り行われた。当日は天気にも恵まれ、清々しい春の風が吹き抜ける新緑の袋田の滝を臨むことができた。

「袋田の滝及び生瀬滝」が平成十九年に国名勝指定を目指してから、指定を受けるまでの道のりは八年もの長きに及んだ。

平成十九年から二十五年まで文化庁との協議、土地所有者である関東森林管理局（茨城森林管理署）と茨城県（河川課）との同意に向けた協議を進めてきた。二十六年一月から三月にかけて現地の測量調査をし、二十六年七月に名勝指定について文部科学大臣に意見具申を提出した。二十六年十一月二十一日に文化審議会から答申があり、二十七年三月十日に晴れて国名勝指定となり、官報告示に至った。

この名勝指定の国の担当調査官だった本中眞元文化庁主任調査官は、記念式典で以下のような祝辞を述べている。

「私をはじめ袋田の滝を訪れたのは、今から十五年以上も前のことになりました。（中略）紅葉の盛りを過ぎた頃の滝の風情は格別で、ひんやりとした空気に包まれ、白いしぶきが急傾斜の岩肌を洗うように四段にわたって流れ落ちる滝の姿は、荘厳であるとともに、言葉では言い表せない美しさに満ちていました。袋田の滝に比べて小ぶりではありましたが、上品で清楚な印象の生瀬滝にも心惹かれました。（中略）日本の名瀑の多くは、古く霊地として信仰の対象となってきただけでなく、地域に固有の伝承をも生み、絵画や和歌などの芸術の源泉となつて、多くの人々の行楽・休養の場として観賞の対象とされてきました。袋田の滝に向かつて左側の岩壁の中腹には不動明王を祀った小さな祠があり、滝と

その背後の屏風岩を中心として、溪谷の全体が霊地と見なされてきたことがわかります。滝壺の周辺は近世水戸藩主の行楽の場となり、近代を通じて訪れた多くの文人墨客が数多の詩歌や絵画を残しました。生瀬滝にも、その起源にまつわる地域創生の民話が伝わっています。こうして袋田の滝及び生瀬滝は日本を代表する名瀑として広く知られるようになりました。（中略）今後は、滝の周辺環境をさらに良好なものとするのももちろんのこと、生瀬富士や月居山などを巡る周遊路、沿道の展望地点などを整備し、名勝としての情報提供を確実に行うことが求められます。大子町におかれましては、このたびの名勝指定をきっかけとして、関係者の間での合意形成と取り組みを進めていかれることを願つてやみません」。

国の名勝指定はスタートでありゴールではない。国の文化財が我が町にあることを誇りに思い、この地の歴史・文化の遺産を守り活かすための努力をしていかなければならない。（家田 望）
※注 六ページの（ママ）とは原文のままの意味である。

編集人 齋藤 典生（大子町歴史資料調査研究員）

野内 正美（大子町歴史資料調査研究員）

齋藤 仁司（大子町教育委員会）

家田 望（大子町教育委員会）

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館

☎0295（72） 1148



式典で挨拶する本中元調査官